

平和の祭壇とアウグストゥスの家系

文学研究科歴史学専攻博士前期課程一年

池田 遼一

はじめに

永遠の都といわれるローマには数多くの建築物がある。コロッセウムやパンテオン等と今でも色褪せないものばかりである。今回のテーマとして挙げる建築物は紀元前13年に建設が決議され、紀元前9年に竣工している「アウグストゥスの平和の祭壇」である。この祭壇に関しては研究者によって意見が異なっている。本稿では、この「アウグストゥスの平和の祭壇」の外側に描かれている計六枚のパネルから、特に、南側に描かれているアウグストゥス一族の行進行列のパネルを中心に彼の家系の特徴を考察し、今後の研究課題を明らかにしていきたい。

「アウグストゥスの平和の祭壇」について

この祭壇は、アウグストゥスのガリアやヒスパニアの平定完了を記念して元老院が彼に捧げたものである。紀元前13年当時はローマから北へ向かうフラミニウス街道が、ティベレ川に向かって直線に

走る途中に建てられている。現在でも祭壇を見ることは可能であるが、当時とは建っている場所が異なる。1936年、ときの独裁者であったムッソリーニの考えでアウグストゥスの霊廟の周辺を再開発した際に、霊廟とティベレ川にはさまれた地に移動された。

この祭壇の構成としては、高さ6メートル、幅19センチメートル、長さ105センチメートルの白大理石の壁に囲まれた中に小さな祭壇があるという造りになっている。今回のテーマであるアウグストゥスの家系を考える際には、外側の計六枚のパネルの方が重要となるので、こちらを取り上げたい。

①東側と西側の四枚のパネル

東側の左パネルには大地の女神テッルスが、右パネルには女神ローマが彫られている。東側の二枚のパネルに登場しているのは、全てが神もしくは擬人神であり、明らかに神々の時代の表現と考えられる。一方、西側にも同じようなパネルが二枚はめ込まれている。左パネルには建国の王であるロムルスとレムスが、右パネルにはトロイア戦争の英雄アエネアスが彫られている。西側の二枚のパネルに登場しているのは、伝承上の人間、つまり現実の人間と神の中間に位置する英雄を描いている英雄時代であると考えられる。以上四枚のパネルは、アウグストゥスの治世がもたらした平和に関する公式宣言の、言葉ではなく、形による表現といえる。

②南側と北側の二枚のパネル

南側と北側のパネルには共に人物の行進行列のパネルが彫られている。南側にはアウグストゥス一族や聖職者たちの行進行列が、北

〈参考文献〉

- ・スエトニウス著 国原吉之助訳「ローマ皇帝伝（上）」岩波文庫 1986年
- ・ピエール・グリマル著 北野徹訳「アウグストゥスの世紀」文庫クセジュ 2004年
- ・青柳正規「皇帝たちのローマ―都市に刻まれた権力者像―」中公新書 1992年
- ・島田誠「古代ローマの市民社会」世界史リブレット3 山川出版社 1997年
- ・島田誠「ギムス・アウグスタと成立期ローマ帝政」『西洋史研究』2004年 pp.24-48.
- ・広瀬三矢子「「アーラ・パキス」アウグスタエ」について―アウグストゥスの統治政策との関連において」『西洋史学』1986年 pp.35-51.
- ・植脇博敏「古代ローマの親族集団―familia・domusを中心―」『西洋古典学研究』1992年 pp.68-77.
- ・Simon, E. *Ara Pacis Augustae*. New York Graphic Society Ltd. 1976.
- ・Wayne Anderson, *The Ara Pacis of Augustus and Mussolini*. Editions Fabriart Ltd. 2003.
- ・Zanker, Paul, *The Power of Images in the Age of Augustus*. University of Michigan 1998.